

第2回 車座・交流会 & 「福島で未来のエネルギーを考えるシンポジウム」 in いわき市

第2回車座・交流会で、福島県いわき市を訪れた。津波、地震、そして原発事故の甚大な被害を受けた復興地の現状認識の為の被災地見学、具体的プロジェクト推進についての議論を中心にした意見交換会、エネルギーシフトに関するオピニオンリーダーを招いてのシンポジウムなど、盛りだくさんのプログラムであった。

【日 時】 2011年12月2～3日 【場所】 福島県いわき市

【参加者】 いわき市を中心に被災地で活動している現地リーダー 21人、首都圏から伺ったエキスパート 37人

【日 程】 12月2日

9時	東京駅出発
12時	まちづくりステーション小名浜到着 復興地リーダーたちと合流
14時	被災現場の訪問 1. いわき公園内の仮設住宅 2. 道の駅仮店舗「くさの根」 3. 津波被害にあった久之浜 4. 原発対応最前線Jヴィレッジ
18時	旅館古滝屋に到着、夕食
18時	復興地リーダーたちからのメッセージ

首都圏からバスで3時間、いわき市内のまちづくりステーション小名浜に、復興地で活躍する現場リーダーたちと首都圏からの参加者たちが一同に会し、プロジェクトは始動した。

まず、被災者を雇用して作った給食サービスの美味しい「お母さん弁当」を食べながら、いわき市で活動しているNPO法人ザ・ピープル吉田恵美子理事長の、熱い思いで走り続けてきた活動報告を聞く。

午後はいわき市内の被災地を訪問。まず、いわき公園内にある仮設住宅や小さな仮設のスーパー。続いて、セブンイレブンを改装して営業している「仮設道の駅・くさの根」を訪問。この地で長年干物づくりをしてきた賀沢さんから工場が流され、

復興しようにも二重ローンを抱えられずに困窮する現状を聞く。放射能の問題ばかりがクローズアップされがちな福島だが、津波による被害もまた甚大だ。

さらに、津波被害が大きい沿岸部の久之浜地区へ。震災から9ヶ月。復興ボランティアの金成さんが「街全体が置き去りにされた、いわき市の縮図のような場所」と表現する。同地区には住宅の基礎部分だけが残され、あたりには瓦礫撤去の作業音だけが響き渡る。そんな久之浜地区でひときわ目を引く住宅がある。復興ボランティアたちが解体予定の住宅の壁にスプレーで花を描くアート活動の成果だ。「いわきに少しでも明るい気持ちになってほしい」と始められた同活動は、「ガレキに花を咲かせましょうプロジェクト」（通称・ガレ花）と呼ばれ、これまでに30軒以上の住宅に花を咲かせてきた。そのアイデアと出来栄に、参加者一同が感心。



最後、夕暮れ前に向かったのは、原発対応の最前線となっているJヴィレッジ。さすがに、施設の中を見ることはできず、車内から概観や様子などを見学。夕方5時前の時点でも、ほとんどの部屋の明かりが点り、作業服姿の人たちがあふれている。周囲には送迎用と思われる大型バスが連なる。原発事故が現在進行形の問題であることを否応なしに痛感させられる。日も暮れたところで宿泊地へ。当車座の現地コーディネーターもしてくれた里見氏が若旦那を務める老舗旅館「古滝屋」が、この日のために館内修繕などを急ピッチで実施。臨時営業にこぎつけるサプライズが！依然として困難な状況ではあるが、復興へ一歩ずつ前進する福島を象徴する出来事の1つとなった。



夕食後は、福島やいわきを中心とする被災地で活動する現地リーダーたちからの活動報告。総勢20人近い方々が自身の活動や現地現状を語る。「震災を機に、それまで愛着の薄かった地元に戻った。今は、世界中に地元のことを伝えたいと思っている」、「放射能については、市民の中にも温度差がある」、「地域をコーディネートできる人を育てなくては」、「福島には若い力がもっと必要だ」、「お金の支援も大切だが、まずは福島に来てほしい、現地を知ってほしい」。次々と吐露される福島への熱い想いや厳しい実情に、参加者の真剣度も次第にあがっていく。また、前回車座の参加者からは、その後の活動報告も。苦労は絶えないが徐々に成果があがっているとの報告は同じく苦闘する福島のリーダーたちにとって、何にも換えがたいエールとなったようだ。

12月3日

7時	朝食
9時	第2回車座・交流会（いわき市労働福祉会館） ワークショップセッション+共有
12時	昼食
13時	福島で未来のエネルギーを考える シンポジウム（いわき市労働福祉会館）
18時	いわき市出発、復興地リーダーたち解散
21時	東京到着、最終解散

2日目は、前夜の活動報告から、福島が抱える課題・復興への提案となる8つのテーマを抽出。テーマごとに数人ずつに別れ、課題解決のために何をすべきか具体的に考えるワークショップを行った。

- I 観光 : マイナスイメージが付いた福島にどうやって人を集めるのか
- II 福島からの社会改革 : 福島が発信地となってパラダイムシフトを起こすには何が必要か
- III 再生可能エネルギー : 福島が率先して再生可能エネルギーへのシフトを発信できるか
- IV 地域産業の再建 : 本当に再起するための資金調達の方法とは
- V 若者による復興計画 : 復興の上で欠かせない若い人材をどう生み出し、育てるのか
- VI ビジネスプラン作り : 具体的に、福島でどんなビジネスができるのか
- VII 農業・漁業の再生 : 福島の農業・漁業をどのように再生するか
- VIII 放射能と共に生きる : 現実を受け止め、放射能と共に生きる福島をあえて考える

ワークショップ後は発表と共有を実施。キーワードは「若者」と「逆転の発想」だ。

「放射能という悪いイメージが定着してしまった福島を改革するにあたり、従来手法の延長線上で取り組んでもダメ。若い人たちが新しい発想・方法をもって、のびのびと活動する必要がある」といった意見のほか「どうせ放射能のイメージから抜け出せないのならば、エネルギーを主題としたスタディツアーの開催や、被ばく医療技術の集積地化、復興ファンドの創設などに踏み出してはどうか」など、「フクシマ」を逆手に取った新しい未来事業への提案が相次いだ。

【2日目午後：福島で未来のエネルギーを考えるシンポジウム】

午後はプログラムの山場「福島で未来のエネルギーを考えるシンポジウム」を開催。一般参加者も含めた約70人がいわき市労働福祉会館の大会議室に集まった。USTREAMによるネット生中継も行い、日本のみならず世界への発信を意識した。

<第1部>

第一部では、開催地いわきで活動されている方々からいわきの現状とこれからについて語っていただいた。被災前からいわきの海岸をパラグライダーで空中撮影し続けてきた酒井英治氏、福島の農家を支援している菅野友美氏、瓦礫撤去のボランティアおよび「ガレ花」プロジェクトを行ってきた金成清次氏、コミュニティ再生に挑む古滝屋若旦那・里見喜生氏らが、これまでの活動を動画やスライドを使って分かりやすく伝えていく。美しい自然環境の再生、農業の復興、津波被災地の再建、次世代人材の育成・・・それぞれが挑む課題は大きく、活動も始まったばかりだが、発表者の熱のこもった話に、未来への希望を感じずにはいられない。逆に、里見氏が最後に訴えた「希望がほしい、夢がほしい」という言葉は、県外からの参加者たちの胸に突き刺さったのではないだろうか。

<第2部>

つづいて第2部では、社団法人ロハス・ビジネス・アライアンスの大和田順子共同代表を聞き手として、早稲田大学環境総合研究センターの岡田久典主任研究員が再生可能エネルギーの可能性と、福島を発信源とするエネルギーシフトの仕組みについて解説した。岡田氏が指摘した主な内容は下記の通り。



- いわき(福島)は日照時間も長く、太陽光や風力発電などの再生可能エネルギーの発信地になる大きな潜在力がある
- ただし、事業を行う際には、地域が主体となって事業を進め、地域が潤う(儲かる)仕組みにすることが大切
- 再生可能エネルギーはコスト高であると言われてきたが、従来のエネルギーコストが割安に計算されてきただけ
- さらにエネルギーの地域間連携にも積極的に参加することで、しっかり売れる仕組みを構築しましょう

データに裏打ちされた説明に、大きくうなずく参加者も多い。原発事故以後、エネルギーシフトをしようにも何をどうすればよいか分からない人も多かった。その点がクリアになったのではないだろうか。また、繰り返し語られた「地域が主体となって、地域が潤う仕組みが必要」という言葉は忘れてはならない。



<第3部>

休憩を挟んで第3部からは、全国各地のエネルギーシフトの実践者・先駆者に集まっていただき、座談会形式で意見交換をしていただいた。各パネリストの発言要旨は以下の通り。



- 手作り太陽光発電のような再生可能エネルギーは少額からでも実現できる
- 除染も兼ねて栽培し始めた菜種の油を使って車を動かしている。再生可能エネルギーの実践は今でも可能だ
- 地域主導で再生可能エネルギーを普及させることで、地域活性化につなげたい
- エネルギーを「つくる人」「使う人」「つなぐ人」のすべてを福島にもってくるべきだ
- 再生可能エネルギーを通じたエネルギー革命を起こさなければ、地方のビジネス・産業にならない
- 福島を再生可能エネルギー実践の「ブランド」にすべきだ
- 首都圏にいる人たちは資金集めだけでなく、情報発信の役割を担うべきだ

<第4部>

最後は参加者全員によるワークショップを開催。「福島イニシアティブ～次世代へのメッセージ」と題して、参加者が8グループに分かれた上で、福島から未来に向けたメッセージを考えた。ここまで第1部から第3部まで、3時間以上にのぼってシンポジウムを熱心に聞いてきた参加者たち。発表者たちの想いや行動の「熱」が移ったかのように、福島から次世代にどんなメッセージを発信できるのか、語り合う。最後は、各グループでそのメッセージと自分たちが果たすべきコミットメントを発表してもらった。

これで、すべてのプログラムが終了。参加者それぞれが未来に向けた想いと決意を胸に、解散となった。

<各グループから出た 2030年へのメッセージ>

- 「福島（福の島）」を「happy island」に
- 自然エネルギー発電への投資は未来への投資だ
- 農業・漁業・林業など1次産業でリサイクルの環をつくる
- まず、自分たちで手作りのエネルギーをつくり・体感する
- 未来に「ごめんなさい」と言う、責任を感じて行動する
- 目先にこだわらず、20・30年後の未来を見据えて行動する
- 自分たちの世代で再生可能エネルギーにシフトする

